

村野次郎創刊

香蘭

二〇二五年(令和七年)十二月一日発行(毎月一回一日発行)

香蘭

第一〇二巻第十二号



2025年(令和7年)12月号

令和7年度 香蘭賞発表

第102巻

第12号

通巻1140号

柳 沼 きよ子

村野次郎作品 私の愛誦歌 (124)

山奥のかなたにはまた町のある

気がしてならぬ東京者われは

『明宝』

この作品を一読してカール・ブッセの「山のあなた」(上田敏訳)を連想した。

三方を山に囲まれた地に生まれ育った筆者は、山のむこうには幸福な場所、理想郷があると思っていた幼き日があり、カール・ブッセを連想し、この村野作品に心を惹かれたのだが、東京の人である村野先生の「山のかなたにある町」とは何を象徴しているのか。

無知による思い違いや勘違いもあると思うが、作品は発表された時点で作者を離れ読者のものになるとしたら、的外れの解釈も許されよう。

一読者としての贅沢は作品の成り立ちやその時の作者の年齢や生活環境など、難しい理屈を述べたり分析検討したりせずに作品そのものを味わえることにあると思うのだ。

『村野次郎全歌集』303頁『明宝』

家 路

加瀬喜美江

春と秋どこに隠れているのだろう 夏夏夏冬二季となりたり

山の上に交差しぐんぐん延びてゆく飛行機雲は秋を旅する

「新世界・家路」のメロディ聞きながら江戸川の向こうに見る夕灯り

世の中に手ごわい相手が多いらしい干潟の跳鯊捕まえられず

釣り上げし鯊の眼のつぶらなり 腹の吸盤でどこにくつつく?

アキアカネ追いつけいる幼子の虫取り網はいつもからっぽ

「山」「川」と呼び合い愛を育みし夢二と彦乃の見し隅田川

定番の「竹に雀」を流しつつチンドン屋行く昭和通りを

古賀春江の描く昭和の「香蘭」の表紙絵に飛ぶわた毛がひとつ

久びさに「息子の部屋」に寝る息子ガンダムプラモデルの傍に

えっちゃんは古き友なり高一で私が好きだった彼の名 言える

ひと言随想 江戸川の風

クラシック倶楽部にシヨパンの流れ来るこの朝少し涼しくなれり

自分の事ばかり言い継ぐメール来て「失礼します」で終えてしまいいぬ
かかりつけの女医の教える減塩の方法「醤油はかけずにつける」

車椅子・ベビーカー・トランクで一杯のエレベーターなり我は歩かん

突然に頂いた「近詠十五首」の依頼に、自信が無く、断ることを心に決めていた。しかし、二月に急逝した友の顔が浮かび、そんな私の後押しをした。生きているうちに何かできる事があればやるようにと。頼りにされ、声をかけて頂ける事は有り難く、自分にとって勉強になる。「生きていくこと」に感謝し、前向きでなければ…と気付かされた。天から友がいつも応援している。江戸川区に住み始

めて三十五年。今では、故郷の千葉よりも長くなってしまった。田舎育ちの自分はしばらく馴染めずに居たが、江戸川の風が下町に優しく吹き抜け、次第に心地良く感じられるようになってきた。江戸川区での日々の生活の中では、新たな発見や些細な喜び、人々との繋がり等に勇気づけられてきた。多くの事に感謝し、友の分まで明日を生きて行きたいものである。

四 選 者 の 作 品

海に降る雪

平塚 千々和 久 幸

草むらを出でし蜻蛉^{とんぼ}がポストまで行くあと先を纏^{まと}わりて飛ぶ
ハイヒールの音^{おと}させ^つ妻^{つま}が後ろから歩いて来たり いつものように
思い出は淡く無力なるものと海に降る雪眺めて帰る

黄昏る窓の向こうに見えるはいつもと同じ風景である

道の辺に木槿の花が咲きたると写メールの来る ご機嫌らしも

雨に濡れ舗道の上に散り敷ける海紅豆の花をわれは詠わす

「愛された時から別れが待っている」 昭和歌謡の嘘を愛せり

もう無駄な抵抗はせぬ吹き寄せる落葉を靴に踏みしめながら

永遠なる夏

東京 桜井 京子

ヌスビトハギ咲いて盛れるところありこつちへ来いと言ふけど行かず
処暑すぎて連続猛暑日を更新す 何処かで壊れてゆく友がある
原爆展見ないと言へりしばらくをベンチにかけて待つてゐた友
寄せかへす波にをさなの来てあそぶ永遠^{とこ}なる夏のやうな夕暮れ
白鷺^{さぎ}が首を伸ばして見る先はかつてわたしが勤めたる街
ひと夏を槐^{えいじゆ}の花は散りこぼれ踏みてゆくなり踏むほかはなく

お荷物を預かつてゐますとは親切な嗚呼^{うわ}またしても詐欺^{さぎ}の電話よ
遠からずほんたうの別れは来るのだが新宿駅西口雑踏に消ゆ

土曜夕刊

横浜 渡 辺 礼比子

水害も地震もあらぬこの夜のラジオに流るる「夏の思い出」
我知らず新聞受けに手を入れる土曜夕刊廃止忘れて

取り込みに行くものとして新聞はなくてはならず呆けし母に

散り止まぬ白さるすべり 郵便も夕刊も来ぬ土曜の夕べ

新聞の最後に読まんと取りおけり柚木麻子の小説「あおぞら」

「多事奏論」待ちがてに読むなかんづく高橋純子の快刀乱麻^{おとど}

大臣^{おとど}らはいとけしからぬことなりや裏金問題に触れんともせず

「マルガシユ」の名にあこがれき児童用地球儀に見しマダカスカルよ

ひと日事なく

鎌倉 高 畠 憲子

打楽器のやうなあなたが居なかつた ひと日事無く回つてゐたが

北の手塚さん南の森田さん卒寿なる〈香蘭の歌詠み〉いまだ現役

笹を描く藍染に博多帯きりり秋立つ夕べをゆく女人あり

大型のトラックすつと止めさせるキツネ目型の黒サングラス

ペランダのバケツが風に飛んだだけ 何事なるかと夫騒ぎ出す

宅配の青年今朝は砂浜をジョギングしてをり白Tシャツに

こんがりと海に焼きたる二の腕がネイビーブルーのシャツより伸びる

「風の盆に行く」とライン来 翌日の「行つて来たよ」は別な友なり

作品一 十首選



(十月号作品から)

高 畠 憲 子 選

・毒のなき歌は詠まぬと決めたるに夾竹桃が堀越えてくる

千々和 久幸

毒のない歌は詠まないと決めている作者。この下句をどう読むかがこの一首の鍵。夾竹桃は知る人ぞ知る毒を持つ植物。葉を生で食べると危険だそう。昔は、墮胎や自殺に用いられたらしい。その夾竹桃が境界を越えて作者に迫る。まるで人のようだ。決めたる「に」は、原因・理由の「なので」という意味に解釈した。伊藤左千夫の「暫くを三間うち抜きて夜ごとと夜ごとと児等が遊ぶに家湧きかえる」と同じであろう。毒のある美しい夾竹桃は、おそらく暗喩。虚か実かは別として様ざまに想像を喚起させ、歌自身、毒がある。

・ひたすらに梅干し筥に並べぬし昔の母よ水無月の午後

市川 義和

漬け梅を干す仕事。梅仕事のハイライトでもあろう。昭和の田舎の子であった筆者は、よく手伝わされた。三日三晩の土用干し。梅の香りと日なたの匂いが郷愁をもって、この一首から漂ってくる。特に〈昔の母よ〉という呼びかけがよい。自分の母の若かった昔、という意味と、いわゆる昔の母、という全般に向かって呼びかけて

いるような、普遍性を含んだ一首として読んだ。

・ダンボールを出せば母言うそうやって私もいつか捨てられるんだろ

伊藤 康子

ドキッとする言葉を発する母上。おそらく、高齢のようだ。同居し、面倒をみておられる作者であろう。身近に介護をすること苦労を思う。加齢により以前は言わなかった暴言が出てくる。受ける娘や息子、主たる介護者ほど辛いもの。俵万智に、親から言葉によるデッドボールを受ける歌があった。受けると痛い。返事の返し方がない。この一首にもそれがある。うちも同じよ、という読者が作者に湿布薬を貼る。

・広島より大阪に来て物言わぬ被曝ピアノの声ならぬ声

柏原 陽子

被曝ピアノ。八十年前に投下された原爆により被曝したピアノのことである。修復、調律をされ、平和を祈るイベントで展示された演奏をされている。広島にあった被曝ピアノの展示が、地元大阪であったようだ。〈物言わぬ〉とあるので、演奏ではなく説明が添えられての展示だろう。作者は黙って置かれていたピアノの声なき声を聴いたのだ。戦争の理不尽さ、むごさの風化が怖い。この一首にも反戦のメッセージが込められている。

・喪なれども久しぶりの新幹線に一瞬旅の気分となれり

斎藤 俊子

葬儀が法事で遠方へ出かけることになったようだ。新幹線に久しぶりに乗った感慨が伝わる。喪なれども、というところに、本来は旅気分は憚られるが、という誠意ある作者の気持ちが出ている。旅のようだ、と一瞬でも思えた心の真実がある。一つ前に「曇天に見

えぬ富士山あの辺りと描くつかの間特急に過ぐ」とあり、本来見えるはずの富士が見えず、あの辺りかと思いついたが、それもつかの間。晴れやかな旅でない暗示が上手い。

・水分をとらねば危険 分かつてはあるるのだが 水が飲めない

鈴木 桂子

この夏は、昨年にも増しての酷暑であった。各地で四十度超えという記録に戦慄した。代表の歌ではないが、〈地球沸騰〉を思った。作者は、「救急搬送」というタイトルのごとく、思いがけず熱中症を患い、救急搬送されたことが一連からわかる。(分かつてはあるるのだが)というところに、苦しさの実感が出ている。偶然の産物だろうが、この旧かなが効果的だ。結句が直截で悲鳴そのもの。極限状況を臨場感をもつてよくぞ表現された。

・しんどけりや心の中に空間を見つけてそこにこもればいいさ

鈴木 順子

死にたくなる時はこちらへ、というサイトを覗いたことがある。自分ではなく、そういう人に寄り添わねばならぬ体験をしたことがあったため。そこでは、「死にたくなる程辛い時はそこから、逃げていいんだよ」「身を隠しなさい」ということを教えている。「命の電話」は混み合つて繋がらない。緊急の逃げ場として、国や自治体が推奨するサイト。これは実在する。この一首を読み、言葉が命を救う、とつくづく思う。心中の空間にこもることはよい方法だ。例えば、新学期に命を絶とうとする子どもがいたら、この一首と出会つてほしい。

・雷の大音響の後しばしパラパラと降る期待はづれに

関口 静子

この夏の酷暑続きに、何とか一雨をと空を仰ぐ。この歌もこの夏を象徴する一首だ。大音響の雷の後、やっと雨かと期待したのだ。

ところが、思ったより降らずパラパラときただけ。結句が言いえてい。一方、降れば降ったで、線状降水帯となり、大変な被害をもたらす。かなわんなあ、の夏であったことを思い出す。

・この日々が無限に続くはずもなしきらりと光る歌われに有れ

森田 徹

この夏、九十一歳を迎えた作者。大病二つを克服。無事復帰された。九十代で現役の歌詠みは素晴らしい。加齢だから、と諦めてはいけない、と教えられる。この御歳にして詠める、あるいはこの歳でしか詠めない歌。一生かけて、きらりと光る歌を一首だけでも詠むべく、会員の私たちも日々葛藤。この人生の先輩にならない、生の証をぜひ詠み継ぎたいもの。

・折り紙は亡夫のための一機にて紙飛行機今ほどの辺ですか

山中 光枝

この十月号の出詠時期は、ちょうど夏の盛り。お盆を詠んだ歌が多かった。迎え盆、送り盆の精霊の乗り物として、胡瓜と茄子が定番。この作者は紙飛行機を折つて、お供えされたようだ。盆棚の紙飛行機とは初めて聞く。そうか、早馬ではなく、飛行機で飛んで来てほしいのだ。作者のウイットに思わず笑いながら、結句の「今はこの辺ですか」に、ほろりとさせられる。こんなユーモアを含む夫恋いの歌もある。こんな風に慕われるお連れ合いは素敵だ。

作品二、三 十首選



(十月号作品から)

丸山 三枝子 選

〈作品二〉

・筆不精が手書きで手紙くれるからあなたの入院少し嬉しい

小笹岐美子

ケータイ電話やメールでの通信時代となってきた昨今、手書きでの手紙が届いた。しかもそれは筆不精の「あなた」からであると言ふ。驚きながらも「少し嬉しい」作者。手紙の主は重い病状ではないのだろう。長年の付き合いで、何でも知っている人からの意外な行爲が掬われ、読み手の心もくすぐられる。更に、読み手に「あなた」との関係をも、あれこれと想像させる歌の膨らみが、心憎い趣向ではある。

・長き髪ザツクリ切りていくらかは軽くもならむわが人生も

田村 久美

髪型を変えるのは、なかなか勇氣がいるものだ。ロングヘアだった作者は思い切って「ザツクリ切りて」さっぱりとした。この歌の核は下句にある。生きてゆくことはそうそう楽なものではなく、どちらかと言えば重いことの方が多い。髪を切って軽くなったから、人生が楽になる筈もないのだが、気分を変えたことで、人生も出来るだけ軽く軽く生きてゆこうと、「いくらかは」ポジティブ思考に切

り変えたかも知れない。

・かたわらにわれの知らない人の死をしばらく聞いて渋谷で降りる

中村 陽子

たまたま乗って座った電車の隣席での会話は「人の死」の内容であった。聞き耳を立てなくとも聞こえてきたのだろう。楽しい会話である筈のない、「人の死」の経緯を聞く羽目になったまま目的の渋谷で降りた。まれに出くわす場面だが、歌に詠もうとは思わなかったので立ち止まった。死なない人はいないから、誰もが通る最後の一場面。見知らぬ人の死の場面ながら、それをサラリと掬って一首にものした。

・身の上は羞すべきなれどひたすらに晒していたり短歌など詠んで

藤本佐知子

日常を短歌で表現している我々は自ずと「身の上」をさらけ出すようなことになる。まして、〈短歌は負の抒情詩〉などとも言われるから。嬉しいことや楽しいことは詠まず、苦しいことや悲しいことの方を詠みがちだ。四句までの自己批判的なもの言いからは、そんな自らへの嫌悪感を伴う反省も感じられる。が、結句の軽いタツチのものの言いで自己戯画化したことで、ウィットを感じさせ、その反省も払拭されたようだ。

・この部屋のドアのむこうにわたくしの気怠きものが今も積まれて

安田 恵子

「この部屋」は、作者の家の一室であろう。もう使うことも無くなって閉めっぱなしの部屋かも知れない。その「ドアのむこうに」は、作者の中にあつた過去の「気怠きもの」が今も積まれて」とあると

言う。ここでは、この抽象的な「気怠きもの」を詮索する必要は無いように思う。人はいつも前向きに洗刺として過している訳ではないから、気怠い気分の日もあれば、平常心で過ごす日もある。

《作品三》

・お喋りの名医が去りてお喋りの名医が来たる清川診療所

小野香代子

「清川診療所」は、作者の行きつけの診療所なのだろう。一読、クスツとさせられて立ち止まった歌だ。お喋りの名医も、無口な名医も世間には居るだろうが、作者の行きつけの診療所には、寄りによって、またまたお喋りの名医が来た。作者はお喋りの名医に満足していたのか、辟易していたのかは分からないが、ここでは、分からなくとも一向に差し支えはあるまい。名医であることが一番大事なのだから。すよね。

・わが街に美術館が建つために鬱金桜が消えてしまいぬ

川久保百子

時事詠ではあるが、作者はこの「鬱金桜」が好きで眺めていたのだろうか。それとも「美術館」巡りが好きで、鬱金桜が消えても良かったのだろうか。一読そんなことを思ったが、それは歌としては問題にしないで良いと思ひ直した。ここでは、淡々と事実の描写に徹したことで、読者が歌に入り込む余地が広がった、と読んでみた。何より事実だけを言ったこの歌のシンプルな佇まいを買いたい、と思った。歌をどう読むかで歌の価値が変わってくるのだが、それだけに読みは難しいと思う。

・風鈴がチリンと鳴りてああ風が来てくれたのだ何かをのせて

佐伯 弥生

夏の風物詩の「風鈴」が、独特の言い回しで詠まれている。ここでの主体は「風鈴」では無く、「風」である。咄嗟に猛暑猛暑の今年の夏を思ったが、下句に来るとそうでもないと思わせられる。風が「何かをのせて」来てくれたようでもある。それは涼しさであり、秋であり、作者自身にある願いや祈りでもあるかも知れないし、「チリン」と鳴る音への憧れであるかも知れない。その意味では幾分粘着質な文体であると言えそう。

・線引けば歪みてしまふ我の文字すこしゆがんだ人生に似て

中野美代子

年齢を重ねるにつれて、身体髪膚に歪みや衰えが色濃くなってくる。昨日まで出来ていたことが今日は出来なくなっている。私も、何かにつけてそれを自覚する日々だ。そんな事実から、作者の思いは自らの人生にも及んだ。時には思いどおりに行かなかった人生。上句の具体がよく利いている。ただ、初句の「線引けば」は、「文字書けば」とすれば落ち着くかと思うが如何だろう。

・子供会手作り流し素麺にはしゃぐ子供と汗だくのわたし

福本 綾子

「子供会」のイベントに借り出されて、子供たちのために手作り流し素麺を作って食べさせているのだ。はしゃぎ回り、よるこんで流し素麺を美味しそうに食べている子供たちの一方で、「汗だく」になつて、子供たちを喜ばせている作者の情景が浮かぶ。結句の一字字余りに、作者の強調したい辛い思いが滲む。子供たちと作者にとつての、濃密な一夏の思い出となつたことだろう。

村野次郎への旅（188）

昭和期の「香蘭」（二十三）

毎月書き継いできた「香蘭」も、今月から昭和三年（1928年）に入る。昭和三年一月号は通巻でいえば第六巻第一號。今月は何と84頁と分厚い。昨年、すなわち昭和二年一月號は60頁だった。急に頁数が増えたのにはそれなりの理由あつてのことだろうが、それについての記述はない。例月通り最初の頁から読んでいくことにする。

表紙裏表紙及び題字は引き続き森田恒友、そして編輯兼発行者の田中次郎にも異動はない。早速、目次から見ていこう。

短歌欄（第一同人）は十六名で、村野次郎以下筏井嘉一、橋本敏夫、池上秋石、本間樂寛、南部松若丸、芥子澤新之介、眞島勝郎、石野正太郎、橋本政一、今井嘉雄、杉浦翠子。次いで「歌人の超然的態度の可否」というテーマの元に二十六名が意見を述べている。これはユニークな企画で、アンケート形式に

千々と久幸

して第一線歌人の意見を徹したものの。総勢二十名である。さらに第二同人は以下の九名で、成田憲三、西村孝、松丸魁一郎、日根淳吉、若林昇、鈴木瑛、庚申薫、杉本喜一、岡田和子、次いで矢代東村のエッセイ「木群」について、睦月集（短歌）に大貫迪子、今福公一以下十四名、杉浦翠子の小エッセイ「風来語」、更生集（杉浦翠子選）に二十四名、寒庭集（酒井廣治選）に十六名、一月私抄（筏井嘉一選）に十四名、初影集（村野次郎選）に神山裕一ほか二十六名、前月歌壇合評、壺中の天地、編輯後記、となつてゐる。

例によつて巻頭の村野先生の作品から見えていこう。

寒空

① 乾風ひと夜さ荒れて家蔭の直土しるく近

て上げにけり

② ははき木を立ちし群鷗^{ひば}冬空に吹かれて寒むく飛びちりにつつ

③ 暮ちかき庭笹むらにみそさざい來鳴くも寒し雪ならんとす

④ 師走の街いそぎて來り冷えきりしわが鼻先をあはれみにけり（歳晩）

⑤ いそぎ來て電車にのれる時の間やふれあふ女のししのかなしさ

⑥ 爲事に追はれ氣づかず居りし窓の外は冬の日脚のとつぷり暮れぬ

この作品は先生が33歳の折のもの。身近に生起する事柄を丁寧^{ていねい}に詠い留めた、未だ習作時代の作品と言つてよからう。100周年記念に刊行した『村野次郎全歌集』には収録されていない。

①の歌、初句の「乾風」は「あぬあかぜ」とルビが振られているが、手元の「広辞苑」にも古語辞典（旺文社）にもない。ネットで検索すると、読み方「からかぜ」、冬に雨・雪など伴わないで強く乾いた北風のこと。多く関東地方に吹く寒風をいう。また西日本で戌亥（乾）の方角、北西から吹いてくる悪風とある。

ここでは文字通りに「冬の乾いた風」程度に読んでおけばよからう。

②③の歌、先生のご実家のあった北多摩郡多磨村上染屋のお屋敷は、さぞかし広い庭があり、さまざまな鳥の声も聞こえたのだろう。わたしが昭和31年に「香蘭」に入会して間もなく、誌上に載った先生のこんな作品を記憶している。

・東京の庭の木に来て休む鳥鳴く声すれど僅かの間

この歌は「東京の庭」と題された一連七首の最初の作品で、昭和32年の作。この軽妙な艶は、往時の先生の詠み口にはないものだ。

⑤の歌、「女」を「ひと」と読ませるのは、昭和歌謡の世界の慣いだと思っていたが、この時代の先生に詠われてみると、わたしの思い込みを改めねばなるまい。また「しし」は広辞苑にもあるから解説の要はあるまい。

さて目次のところでタイトルを出しておいたが、今月号は「歌人の超然的態度の可否」という歌壇を横断する一大アンケート(?)が掲載されている。質問の主旨が明記されていないので推察するほかはないのだが、当時

の詩歌壇の第一線にある二十六名の答の方から逆に質問の主旨を読んでいる。

○萩原朔太郎

超越といふことにも色々な意味があるだろうが、歌壇の現状のやうな超越なら、全て始から問題になりはしない。萬葉古典の訓話を事とし、創作的精神の本質を失つてゐる。歌壇は、宮内省御歌所の連中より、藝術的に尚一層墮落したものである。しかも、頑迷固陋、理を説いて解らない奴等が集まつてゐる。こんな歌壇に對してマジメに物を言ふ興味すらない。

○松村英一

眞に超然的態度が執り得られるならそれは甚だ羨しいことだと思ひます。小生等はそうした心境にまだ遠い故か、そこまで到らず、常に雑事に妨げられてゐて汗顔に堪へません。精々修業して一日も早くさうした心境に到達したいと願つてゐます。

○小泉冬三

超然的態度（假にさういうものを認めるとして）は決して賛すべきものでないかと存じます。さりとてジャーナリズムに堕ちることゝも短歌の本質から見てよくないと存じます。

口語歌、無技巧歌といふやうなものが漸次見えて初めて來てゐることはこの間の消息の微妙なものを傳へてゐるはせないでせうか。

○中西悟堂

歌人諸氏が超然的態度を持して居られるのは特むところがあつてさうして居られるのでせうから、はたからこれと可否を申し上る譯にはまゐりません、あの態度は、しかしよいと思ひます。と同時に、全體としてもつと積極的になつてほしいと思ひます。

○佐藤惣之助

小詩型保持者は凡て個人的焦點をもつて出發致す傾向之有候故自然自己満足の作詩にて事足れば超然的態度もやむを得ぬ事と存し候。徒に街路に旗ふりて混成新語をふりまわす輩よりは詩歌本然の禮節を心得泳糸雪竹の興趣を研究する人こそ友人と致し度候。社會の傾向を觀取せざれば藝術がおくれるなぞと騒ぐ徒は騒がせ申すのもよろしく候。可否いかんとも申述べ難く候。

以下、半田良平、吉植庄亮、尾山篤二郎、土田杏村、石井柏亭、岡野直七郎、矢代東村、中河與一と続くが次号にしよう。

選歌の余白に

——鈴木桂子同人との対話 (二)

千々和 鈴木さんの毎月の作品を拝見して気づきましたのは、殆どが「正述心緒」で詠まれており、転調（転位）を含んだ歌が少ないということです。

鈴木 「せいじゅつしんしよ」ですか。

千々和 ええ、これは万葉集の相聞歌の、表現のしかたによる分類の「寄物陳思」と並ぶもの（岩波現代短歌辞典）とされています。

鈴木 はあ。

千々和 分かりやすく言えば、初句から結句までをひと息に詠み下した作品のことです。鈴木さんの作品の殆どがこのスタイル（かたち）で詠まれております。つまり区切れ（二句、三句、四句で切れ）がない（少ない）。区切れを置くことでそれまでの内容に転位（転調）が生まれます。

鈴木 は、はい。仰る意味は何となく分かります。

千々和 『村野次郎全歌集』の「明宝」p293「金」、297、同「路上」から例歌を挙げてみましょう。

・わが金となりて持ちたる給料を時々ポケットの上より撫でつ
・帰り来て鞆畳にわが置きつ今日は一日暑き日なりき

一首目は初句から結句までひと息に詠み下されていますが（正述心緒）、後の歌は三句でいったん切れ、そして四句から別の世界が新たに立ち上がってきます。

鈴木 ええ、ええ。

千々和 ついでにわたしの三句切れの歌を引いてみます。

・この男にも得意な日々があったのだ風に追われるように消えしが

「香蘭」2025年2月号

いずれも転位（転調）は緩やかで、読者が意味を掴めずに三句と四句の谷間に落つこちる（！）気遣いはありません。しかし、次のような歌になると様相が変わって参ります。

・春の夜の夢ばかりなる枕頭にあつあかねさす招集礼状

塚本邦雄『波瀾』

・マツチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや

寺山修司『空には本』

塚本、寺山作品は共に三句で切れてそこから転位（飛躍）します。切れの角度と飛翔力の広がりによって、転位（転調）による一首の面白さが増します。鈴木さんもこんな手法を会得されると、作品の幅と深さがぐんと広がりますよ（笑）

鈴木 いえいえ、わたしにはそんなセンスも才能もございません（笑）ただ「正述心緒」だけではなく、二句切れや三句切れの作品にも挑戦してみたいですね。

千々和 才能、センスの問題が無いわけではございませんが、もともと定型したいが内包している力です。

鈴木 先生の仰る「定型の恩寵」ですね。

千々和 まさしくその通り（笑）大いに期待致しております。

一頁公論

(55)

熱暑に思う

小原 裕光

今年の夏も、暑い日が続き40℃以上が各地で観察され、七月三十日に兵庫県丹波市で41・2℃の史上最高気温が記録され、一週間も経たない八月五日に、群馬県伊勢崎市で41・8℃と史上最高気温が更新された。その後も各地で40℃を超す日が続いている。

この時期になると思い出すのは、故郷、北海道十勝の高校での古典の授業に出てきた『徒然草』第五十五段である。(家のつくりやうは、夏をむねとすべし。冬はいかなる所にもすまる。暑き頃、わろき住居は、堪えがたき事なり……) 今ならよく分かるが、厳しい冬の生活しか知らない生徒達には、とても納得できるものではなく、「兼好法師は何ということを言うのだ」と皆で話した。私達の子供の頃の道東の十勝の冬は、平野部でもマイナス20℃以下はしょっちゅうで、マイナス30℃以

下になることも珍しくはなかった。朝起きると布団の襟が、息で真っ白くなっている。また、窓ガラス一面に、氷の結晶の描いた模様(窓霜)が、毎朝見られるような、厳しい冬だった。グラウンドに降った雪を踏み固め、ホースで水を撒くと翌日にはスケートリンクが出来上がっているのだ。

徒然草に書かれているように、昔は、それほどに夏の暑さが大変だったのだろうか。

和歌集等のデータベースで夏の歌を探してみたら、夏の厳しい暑さの歌は、詠まれなかったのか少ないようだ。その中から

・ ゆきなやむ牛の歩みにたつ塵の風さへ熱き
夏の小車 (玉葉和歌集 藤原定家)

・ ひとへなる蟬の羽衣夏はなほうすしといど
あつくぞありける (後拾遺和歌集能因法師)
・ 今日よりはたつ夏ごろもうすくともあつし
とのみや思ひわたらむ (詞花和歌集 増基)
・ 天喜四年(西暦1056年)の歌合の一首。
いかにせん夏はくるしきものなれや衣かへ
ても暑さまされば(或所歌合 詠人知らず)
『兼好法師集』二八五首には、夏の暑さを詠

んだと思われる歌は見つからなかった。
しかし、近頃の暑い夏を何年も経験すると、兼好法師の徒然草に納得してしまふ。

地球温暖化は、人類の化石燃料の大量使用により発生する温室効果ガスの二酸化炭素(CO₂)が原因と言われている。CO₂は、植物の光合成には必須で、植物の生産する穀物等は、動物の生存には無くてはならない物なのに。メタンガスも問題とされ、反芻動物の牛の暖気までもが、問題とされている。

温暖化により、北極圏の解氷、氷河の縮小、台風・ハリケーン、豪雨の発生や海流の変化による漁獲量への影響も起きている。

異常気象で、現在の四季が二季になってしまうのではないかと、危惧されている。

日本の独特な文化である和歌や俳句は、豊かな日本の四季が有るからこそ生まれるというのに。厳しい冬と、暑い夏の二季になるとしたら……想像するだけでも味気ない。

温暖化を抑制し、日本らしい豊かな四季の中で歌が作られ、牛には緑豊かな牧場でのんびりと反芻をさせてあげたいものだ。

令和七年度 香蘭賞発表

受賞作

終はらない夏

鈴木 桂子

佳作 四篇

ふるさとまとめて

小笹岐美子

残り時間

石井 雅子

家族のかたち

江口 絹代

白い夏

松沢みどり

選考委員

千々和久幸

丸山三枝子

桜井

京子

渡辺礼比子

高畠 憲子

令和7年度香蘭賞選考結果一覧表

題 名	作 者 名	選者名					合計点
		千々和	丸山	桜井	渡辺	高畠	
1 家族のかたち	江口 絹代	2位・4点	1位・5点	4位・2点			11点
2 哀れな詩神 (ミュージズ)	小城 勝相						
3 ふるさとまとめて	小笹岐美子		2位・4点	2位・4点	2位・4点	2位・4点	16点
4 現人 (うつせみ)	城 富貴美						
5 これは事件だ—USスチールの—	犬山 俊昭						
6 風	会沢ミツイ						
7 胸底に咲く	中島由美子	4位・2点				3位・3点	5点
8 残り時間	石井 雅子	3位・3点	3位・3点	3位・3点	3位・3点	5位・1点	13点
9 大きタやけ	土井紘二郎	5位・1点	5位・1点	5位・1点	5位・1点		4点
10 変わらない日々	満木 好美						
11 白い夏	松沢みどり		4位・2点		4位・2点	4位・2点	6点
12 また楽しからずや	川久保百子						
13 二〇二五年夏	塩田 文子						
14 暑き日なれど	佐伯 弥生						
15 終はらない夏	鈴木 桂子	1位・5点		1位・5点	1位・5点	1位・5点	20点
16 卵味噌	小野香代子						

●香蘭賞受賞・鈴木桂子。

●佳作・小笹岐美子、石井雅子、江口絹代、松沢みどり。

○5の題名：「これは事件だ—USスチールの逆転ディールとトランプ関税—」

令和七年度 香蘭賞受賞作品

終はらない夏

西宮 鈴木桂子

茫々と時の過ぎゆく苦しとも楽しともなくわれの老年

父早く逝き夫また早く逝きぬれば老いたる父を夫を知らない

幼な日より父病みをれば死を近きものとして知るその頃すでに

一匙のかゆ口にして病む父のいのち終はれり 十八歳じふはちの冬

父の死に夫が重なる、生検は悪性リンパ腫末期を示す

この若さで死なせる訳にいかないと延命拒否は退けられて

生きたいと何度も願ふ。死なないと何度も言ひて、あの夏の日を

老いるにはまだ早ければ逝くなどと思ひもよらず 夫の死に遇ふ

受賞の言葉

鈴木 桂子



この度は「香蘭賞」を頂きありがとうございます。選考に当たられた千々和先生はじめ選者の方々に厚く御礼申し上げます。そして短歌と香蘭に出会う切っ掛けを作って下さった亡き横山慎夫様、ありがとうございます。私は父を結核で、夫を癌とともに早く亡くしました。当時死を察した父は、「すまない」と言っただけでした。夫は、医師の指示で駆けつけた肉親、縁者、子ども達を前にして、「まだ、死なない」と、全員を即刻病院から帰しました。生きるつもりが、死を避けられないものとして最終的に覚ったのはこの時

暑さに耐へ寒さに耐へて淡々と父のない日を夫のない日を

ああ、この人はよく知つてゐる疲れ果てひとりと思ふ時の寂しさ

人間らしく生きてゐるかと思ふ人間であることふと忘れたり

ゴミ屋敷みたいな部屋で月末は歌が書けずに呻いてゐるが

今の世にこれはさうなる息子ゐて生き難き世は今も昔も

あなたをいぢめた女子をあなたは何度も殺す 心の中で

ぐうたらで怠けものなる心底はこれはないためと誰か知る

負けてもいい逃げてもいいそのままのお前でいいと言つてはみたが

きのふよりけふよりあした、あさつてはあるのだらうか我らのための

朝夕に教会の鳴らす鐘の音が神はゐないと聞こえてならぬ

古稀すぎて仕事を探せば調理補助、清掃、介護、たまに先生

老いてまた先生となる。働くはパンのためなりいつものごとく

ではないかと思ひます。生きたいという願いを胸に、仕事の行く末も、子の成長も見届けることなく、生半ばにして父も夫も逝きました。二人の若い死は喪失というより、無念の死、抗いがたい一つの不条理として私に深く刻まれました。その思いをここに詠みました。短歌に日の浅い私ですが、この作を通して何かを伝えられたら幸いと思ひます。

歌歴

昭和23年生まれ

平成21年 香蘭入会

平成25年 香蘭新人賞受賞

平成30年 第一同人

人生はかくかくしかじかさは言へどかくかくしかじかならぬ人生

熊蟬の初鳴きを聞く去年より三日遅れて 平和を蟬に

うおんうおんと群集して鳴く熊蟬よ。山揺るるまでわれのため鳴け

嗚呼、夏は花になりたいひまはりの 野に咲く万まんのなかの一本

炎天下夏の緑が濃くにはふ三十八度まうしよの夏こそ満ちるいのちぞ

白く乾いた真夏の街の沿道に百日紅の赤のあざやか

ペン先にこころ集めて歌書けば灼やかるることき午後を疲るる

今もなほ会へるはずなき人を待つ渋谷三叉路真夏の昼を

何でも見つかる今の世に幸せが見つからなくて 終はらない夏

机きに寄りて静かな昼の中にあるわが旅ももう終はりに近い



令和七年度 香蘭賞佳作四篇（抜粋五首）

ふるさとまとめて 鎌倉 小笹 岐美子

・教科書のグラビアページに我が町のコンピナート載り誇らしかりき
・出身は、と聞かれて我は言い淀む「安倍の山口」と言われたくなくて
・男尊女卑、立身出世のお国柄 民謡までも「男なら」とは
・山頭火も中原中也も取り上げぬ現代国語の授業でありき
・おなごには学問はいらぬという祖父に抗い励んだ受験勉強

家族のかたち 柏 江口 絹代

・歳晩のさびしい月の夜に聞く八代亜紀の「もう一度あいたい」
・それつきり姿を見せぬ尉鷗それつきりなる思い出積もる
・おかあさん、お土産ですと子の妻が布バッグから菓子パン出しぬ
・木々の香がふいに濃くなる夕まぐれ小学校の孔雀が鳴けり
・縁日に求めし青の水中花この世にあらぬ花をひらきぬ

残り時間 習志野 石井 雅子

・街角に駅に時計が消えてゐる残り時間はもう数へない
・夕陽さす砂浜をゆく影のびてジャコメッティの彫刻の人
・孤独死とミャンマーにある詐欺拠点が今朝の新聞の一面記事で
・シダ茂りジュラ紀のやうな草叢で「ザウルスつて蜥蜴のことだよ」
・目覚めたら心に雨が降つてゐた青に変はりし庭の紫陽花

白い夏 さいたま 松沢 みどり

・カラカラと氷を回し飲み干せばジンは真白き花野の香り
・なんだかもうどうでもいいねと笑う夫六十過ぎて給与は減って
・自分以外はみんな他人と思うとき部屋において息苦しくなる
・久しぶりにホワイトモカが飲みたくて会社帰りのスターバックス
・週末は週末のことだけ考える来週は来ないような気もして